

悲しみには、対処できるものと、対処しないほうがいいものがあるのだと思う。

これまでの人生、たいいていのことには対処して上手く生きてきたつもりでいた。失敗したときは、落ち込んで、原因を考えて、次に活かせるようにしてきた。誰かに嫌なことをされたときは、話しても通じないなら距離を置いて関わらないようにした。寂しさや悲しさに襲われたときは、美味しいものを食べたり、好きなことをしたりして、なんとかやり過ごしてきた。

私にとって対処とは、少しずつ忘れて、向き合わなくても生きていける形にすることだった。それが私なりの処世術で、そうやって何とかやってきたつもりだった。

でも、初めて、そうしてはいけない気がする感情に出会った。

私は猫が好きだ。

昔からそう思って生きてきた。少なくとも、昨年末までは。

猫、好きですよ。その言葉の重みが変わることにになるとは、思っていなかった。

その子は、ふさふさした小柄の黒猫だった。

男の子なのに、写真を見せると誰もが女の子だと見まがうくらいのかわいさで。くりくりの目とモサモサの耳毛がチャームポイント。おなかをなでられるのが大好きだった。生まれたばかりの子猫のときから知っている。もともとは母の猫で、兄弟猫たちと健やかに猫らしく暮らしていた。

家庭の都合で母方の実家に預けられてから、性格は一変していた。

他の猫たちは各々新しい環境に馴染んでいったらしいが、その子だけは、古い家の一番隅の、誰も手の届かない暗いところで、ふるえて睨んでいるような子になってしまった。誰にも近づかず、寒さにふるえ、どんどん痩せていったと聞いた。

私がその子と再会したのは、二年前のことだった。

このまま痩せて死んでいくくらいならと、私が飼い主になって引き取るようになった。

最初はこたつにずぼっと潜り込んで、一切出てこなかった。音もたてず、鳴きもせず、水も飲まず、ごはんも食べず。でも、あたたかい場所にいるならそれでいいと思った。

何か用事があるときも、いきなりこたつを開けなかった。外から声をかけて、開けるねと伝えてからそっと開けた。触るときも、触っていい？と声をかけてから撫でた。同じ目線で過ごすためにこたつに上半身を突っ込ん

で、逆こたつ状態で過ごした。

怖いことが起きたときは必ずそばにいた。何が起きたのか、そのたびに説明した。大丈夫だよ、絶対に守るよ、味方でいるよと約束をした。

その子は次第に心を開いてくれた。

もしかしたら、昔々に一緒に暮らしていたことを思い出してくれたのかもしれない。

「おなかをなでて」とごでんとそこに寝転がり、強烈な頭突きをし、人の顔を舐めまくり、膝の上に鎮座する猫になった。

仕事をしているといつもどこかで監視をしていて、待ちくたびれるとそのまま前のめりにガクンと寝ていることもあった。待ちきれずに膝の上に乗ってくることもあった。お気に入りのおもちゃの上にどかっと座って、「かまってくれないんですけど」という顔をしていることもあった。どこに移動するにもついてきて、たまに外出すると、帰ってくるまで扉の前でずっと待っていた。寝るときは、私の左側がその子の定位置だった。

不服なときは「おあ〜ん」と鳴き、ごきげんなときは「ぷるる」とおしゃべりした。最初は声すら出さなかった子が、いろんな声や表情、気持ちを向けてくれるようになったことが、本当にうれしかった。

再会したばかりの頃、おなかは毛がなくてつるつるだったけれど、たくさんなでて、声をかけて、一緒にのんびり暮らして、おなかはふさふさになった。ふさふさのおなかを見るたびに、この子はもう怯えなくていいんだと思えた。

やせ細っていた体は標準体重になった。ごはんをえり好みするくらいにはわがままになった。いいぞ。

そんな日々のうれしい変化はあれど、その子の根底にはどうしても恐怖が付きまとっていて、いつも逃げ道が必要だった。生活において、気を使わない時間はなかった。

クセになってんだ、音殺して動くの。

結局、インターホンが鳴るだけで目にもとまらぬ速さでこたつに隠れるくらいには、怖がりが治ることはなかった。

だけど、がんばって、一生懸命に普通の生活をしてれていた。

本当は、とても愛情深い子だったのだと思う。

常に私の近くにいて、トイレや風呂のときですらそばにいないと気が済まなかった。たまにうっとうしいと感じてしまうほどに。でもそれは、愛だった。

朝も明けきらない時間に起こされて、遊んでと要求される。勘弁してくれと思うこともあった。でもそれは、信頼だった。

私以外の人間の気配を感じる出来事があると、こたつの中かベッドの下に瞬足で隠れる。大丈夫だよと言うまで絶対に出てこない。大丈夫だよと言うと、必ず出てきてくれた。それは信用だった。

私にとって、その子は人生で初めて、掛け値なしの愛をくれた存在だった。

期待も、損得も、立場も、遠慮もない。そばにいたいという気持ちだけでそばにいてくれる、たったそれだけの、大きい愛だった。

それほどの愛をもらっても、私は、かわいいとしんどの間を反復横跳びしながらその子と暮らしていた。私に愛を与えるかわりに、たくさんのことを考えさせ、たくさんの方断も引き受けさせた。何度も悩んだ。話しかけて、様子を見て、それでも最終的には私ひとりで決めなければならないことがたくさんあった。

その子の口の中に癌ができたとき、歯と一緒に下あごの半分を切除する方断をしたのは私だった。猫エイズだとわかってから、病院の先生と相談して、治療をやめて看取りを選んで介護したのも私だった。

火葬のときに、お願いします、と言ったのも、私だった。

あの子と二人で暮らした時間は、あまり長くない。

たった二年だ。

それでも。

責任を引き受けること。苦しみの中で方断すること。見送ること。愛すること。

人が年齢を重ねたり、人生の節目を越えたりしながら、少しずつ心と体で学んでいくことを、あの子との時間の中で一気に教わった。

そしてあの子は、旅立って行ってしまった。

その子が亡くなったのは、昨年末、私の誕生日の前日。初めての全社会議の日だった。腫れた目は

Zoom がきれいに補正してくれた。自己紹介をする私の傍らには、動かなくなったその子がいた。

翌日、私の誕生日に、その子を火葬した。

火葬の炉の扉が閉まる直前、ちょっと待って、と言いそうになった。お別れの時間はたくさんもらったのに。一生一緒にいようねって約束を思い出してしまったから。

言わずに耐えられたのは、その子に、大丈夫だよと言ってあげるのが私の役割だったから。

軽くなった体は、もっと軽くなって、私の手もとに収まった。

生活が変わった。

朝早くに起こされることはなくなった。

トイレの処理もしなくていい。

ネイルも自由にできる。

気軽に出かけられることもできる。

急に吐いてじゅうたんを汚されて、慌てて洗うこともない。

ぼわぼわの毛が舞うことも、そこらじゅうに散った猫砂を踏んで悶絶することも、ずっとついて回られることも、寝る前に小一時間遊びに付き合わされることも、新鮮なお水に替えてとわがまを言われることも、もう、ない。

後悔しないように、日々できることは全力でやった。

それでも後悔は、今も湯水のように湧いてくる。

失敗なら、反省して次に活かせる。傷なら、かさぶたになって治っていく。でも、あの子を失った悲しみは、この痛みは、それらとは違う。

この痛みがもしも無くなるのだとしたら、それはあの子のことを忘れたときだ。

だから、治したいとは思えなかった。

この悲しみには対処したくなかった。

私は猫が好きだ。

それは今も変わらない。

でも、あの子のことを愛してから、その言葉だけでは足りなくなった。

新しい猫を飼いなよと慰められることもある。

だけど、私が恋しいのは猫ではなく、あの子だった。

もう触れられないし、もう返事もない。

だからこそ私は、これからもあの子を愛し続けて、悲しみ続けることにした。

悲しみが消えないということは、あの子を忘れていないということだから。

意識が変わった。

あの子が愛してくれた自分を大事にしようと、人生で初めて思った。

それからは、私を雑に扱っていた人間は逆ギレの末に去り、大事にしてくれる人が残った。

人生が少し楽になった。

あの子がくれた愛が、私を守ってくれている。

私はこれからも、あなたにもらった愛と向き合いながら、悲しみとともに生きていくよ。